The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Jacques Derrida, Theory and Practice, translated by David Wills, Edited by Geffrey Bennington and Peggy Kamuf
Author(s)	中谷, 碩岐
Citation	共生学ジャーナル. 2024, 8, p. 338-343
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94971
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

Jacques Derrida
Theory and Practice
translated by David Wills, Edited by Geffrey Bennington and Peggy Kamuf
The University of Chicago Press、2019 年、127 頁

中谷碩岐*

以下、上記の文献を参照する際には（）内に頁数のみを記す。

本稿は、2019 年にシカゴ大学出版局から刊行されたジャック・デリダの講義録『理論と実践』についての書評論文である。なお、既に英語版に先立つ 2017 年にパリ・ガリレー社から仏語版が刊行されているが、今回の書評に当たっては英語版を参照した(1)。

著者であるジャック・デリダ（1930-2004）は、ミシェル・フーコーやジル・ドゥルーズと並んで 20 世紀フランスを代表する思想家の一人であり、「差延(différance)」や「脱構築(déconstruction)」といった語を用いて独自の思想を展開したことで知られている。『グラマトロジーについて』や『声と現象』『エクリチュールと差異』（いずれも 1967 年）といった著作で展開されたその思想は、現在も哲学のみならず文学や法学、建築、ポストコロニアル・スタディーズといった様々な分野に影響を与え続けている。

彼はキャリアを通じて膨大な量の著作を刊行していた。加えて、現在も 1959 年から 2003 年に至るまで様々な場所で行われた全 43 巻にも及ぶ講義録が続々と刊行されており、必ずしも著作に現れないデリダの思想の生成を見て取るための重要なアーカイブとして参照されている。2023 年 1 月現在、日本でも『獣と主権者』『死刑』『ハイデガー』『生死』『思考すること、それはノンと言うことである』といった講義録が既に邦訳されており、これらの講義録に基づいた研究も精力的に行われている。この『理論と実践』もこうした講義録のひとつであり、1976 年から 1977 年にかけてパリ高等師範学校において実施された全 9 回の講義が元となっている。

講義の内容については順を追って見て行くが、デリダの多くの講義録の中でも、とりわけこの講義はマルクスへの集中的な言及が見られる点にお

* 大阪大学大学院人間科学研究科 博士前期課程；u084515g@ecs.osaka-u.ac.jp

いて特徴的である。既に 1971 年にはマルクス主義者であるジャン＝ルイ・ウードビーヌがデリダの思想におけるマルクスへの言及の不在の理由をデリダ自身に問うていた（cf.『ポジシオン』p. 91）が、実際のところ『マルクスの亡霊たち』（1993）においてはじめて集中的にマルクスについて論じるまで、デリダはその著作において意外なほどマルクスについて論じることはなかった。しかしこの『理論と実践』におけるアルチュセール、そしてマルクスへの頻繁な言及は「表立ってマルクスを論じない」というデリダの態度が必ずしもマルクスへの無関心に由来するのではないことを示している。この講義の読解を通じて読者はデリダとマルクス、あるいはマルクス主義の関係について、新たな理解を得ることが出来るだろう。

この講義自体がデリダの一次文献であり、かつ本邦では殆どその内容が紹介されていないという状況に鑑みて、本稿では『理論と実践』で論じられている多岐にわたるデリダの主張の内実について解釈・論究することはせず(2)、むしろ講義の中でデリダが言及する思想家の固有名や読解の対象となるテクスト、扱われている主題あるいはトピックの紹介を行うことで、大まかなデリダの議論の流れを示すことを試みた。紙幅の都合上（そして評者の能力不足により）概略的な見取り図に留まらざるを得なかったが、読者がそれぞれの関心からこの講義録を読み始める一助となれば幸いである。以下では、全 9 回の講義について、順を追って各回の内容を概略する。

第 1 回講義では「理論と実践、それはなされなければならない(Faut le faire/must be done)」というテーゼが提示され、その分析を通じて議論が開始される。デリダは「理論と実践」という対立軸をとりわけ今日において保持している哲学として「マルクス、あるいはマルクス主義の伝統の哲学的言説」（p. 5）を取り上げる。ここでは「フォイエルバッハに関するテーゼ」が取り上げられ、それぞれのテーゼ、とりわけ最終節である第 11 テーゼ(3)についての分析を通じて、「理論」「実践」「革命的実践」といった概念について議論がなされる。その上でデリダはこのマルクスのテーゼが「哲学一般」の終わりを意味するのかという問いを提起し、グラムシによるクローチェ批判や『マルクスのために』に代表されるアルチュセールの議論を補助線として、マルクスのいう「実践」と「哲学」との関係を分析していく。また、講義の末尾においては、ハイデガーの技術論との関係を含めた今後の議論の方向性が示唆される。

第 2 回講義では、アルチュセールの「唯物弁証法について」(『マルクスのために』所収）のエピグラフである『フォイエルバッハに関するテーゼ』第 8 テーゼ(4)が主題とされる。ここでは、このテーゼにおいて実践が理論と対置されるのではなく「理論を神秘主義へと誘い込む」ものと対置されていることが強調され、実践もまた「理性」に奉仕することが論じられる。こうした議論を端緒として、この回ではアルチュセールというよりもむしろカントが中心的に論じられているように思われる（更にハイデガーの「根拠律」、ポンジュの「寓話」を巡って次々と議論が展開される）(5)。同時にフッサールの『幾何学の起源』や『デカルト的省察』における理性と理論、実践の関係がカントとマルクスと同型のものとして論じられる（p. 36）が、ここでは『幾何学の起源』「序説」（1962）と「形式と意味作用」（1972）への参照指示もあり、デリダの 1960 年代からの議論の連続性をうかがわせる。

第 3 回講義から第 5 回講義では、第 2 回講義で示唆されていたアルチュセールのテクストの読解が本格的に開始される。第 3 回講義では「唯物弁証法について」の読解を中心として、アルチュセールが「唯物弁証法について」のエピグラフになぜ第 11 テーゼではなく第 8 テーゼを選んだのか、という論点からマルクス主義およびアルチュセールの主張における「実践(practice)」と「プラグマティズム(pragmatism)」との差異が検討される。また、こうした議論を引き継ぎつつ、アルチュセールがマルクス主義の中に見出した「哲学」と伝統的な哲学/哲学史の関係、そしてそこにおいて「理論」という概念が与えられる位置などの分析が行われる。こうした「理論」という語の内実は、第 4 回講義でより詳細に検討される。

第 4 回講義でも引き続きアルチュセール「唯物弁証法について」の読解が行われ、マルクス主義の哲学が持つ特異性を検討する為にアルチュセールが提起する「ヘーゲルとマルクスの弁証法の差異」といった主題や「実践一般」「理論的実践」「小文字の理論(theory)」「大文字の理論(Theory)」の区別、そしてそれに対応する哲学の形式と言った論点について、アルチュセールの議論を参照しつつ議論が行われる。しかしとりわけ目を引くのは、その中で「実践一般」という主題と関連して「ヒューマニズムについての書簡」におけるマルクスへの言及（cf. 『道標』p.430）が参照され、ハイデガーの議論との積極的な接合が行われる点である。こうしたデリダのハイデガーへの着目は、この後の講義においてより前景化することになる。

第 5 回講義では「理論的実践の理論(Theory of theoretical Practice)」（p.69）としてのマルクス主義哲学の位相、あるいは「哲学」の「縁(Edge)」を巡って、アルチュセールの『レーニンと哲学』における哲学と実践の関係が議論される。（アルチュセールが論じる）マルクス主義的哲学を範として、「哲学」をあふれ出す「思考（thinking）」の問題が取り上げられている点も注目に値するが、そこから更にデリダがハイデガー（そしてニーチェ）に対する「マルクス主義的読解(Marxist reading)」の不在を述べ、ハイデガーとマルクス主義を接合する為の「潜在的に脱構築的な読解」（p. 73）が『技術への問い』、そして「ヒューマニズムについての書簡」を参照しつつ具体的に行われている点が特徴的である。「フォイエルバッハに関するテーゼ」等を参照しつつ、弁証法的唯物論における「生産」と「技術」の関係がハイデガー的な「存在忘却としての形而上学の歴史」、及びそこでの「生産」と「技術」という問題系と接合された上で、更に詳細な議論の為に「技術への問い」、そして「科学と省察」という二つのハイデガーのテクストが指示される。また、ハイデガーに対して、とりわけ彼の「思考」が「哲学」と持つ関係や「本質的な起源」（p. 79）へと遡行しようとするその傾向性について疑義が提起される。こうした疑義のもとハイデガーの議論を検討するべく、次回以降参照されるアリストテレス『ニコマコス倫理学』についても短い確認が行われる。

続く第 6 回から第 8 回講義では、第 5 回で導入されたアリストテレスの議論を導きとして、特に「科学と省察」及び「技術への問い」を中心としたハイデガーの議論が検討される。とりわけハイデガーの議論の注釈という側面が強いように思われる第 6 回講義では「科学と省察」が中心的に取り上げられ、ハイデガーが「省察」に与えた「歩み(Step)」というモチーフやハイデガーが諸学に対して持つスタンスが確認される。第 7 回講義では、第 5 回において提示された問いを再び扱うことが明確に述べられ、ハイデガーが「技術への問い」において参照するアリストテレスの四原因説について、アリストテレスの議論を再構成する際にハイデガーが（意図的に）提示する「欠如(Lack)」を巡って議論が展開される。第 8 回講義においても、引き続きハイデガー「技術への問い」が検討されるが、そこではとりわけハイデガーのアリストテレス読解において他の三原因を取りまとめる「銀細工師」の働きに注目して議論が展開され、ハイデガーにおける自然の「生産」と「技術」とのかかわりが論じられる。

最後に、第 9 回講義にはこの講義の中では例外的な精神分析への集中的な言及が存在している。ここでデリダはハイデガーのいう「近代技術の時代」に精神分析が属するかという問いを提起し、精神分析との関係からハイデガーにおける技術の問いを分析している。

以上が『理論と実践』講義の概略となる。読解の補助となれば幸いである。

最後に、全体の議論の注目点を評者なりの視点からいくつか述べておきたい。明示的に主題とされ、しばしば取り上げられるアルチュセールとマルクスの関係は言うまでもないが、その裏で常に主題となっているのはハイデガーであるといっても過言ではない。とりわけ第 5 回講義以降の哲学と思考の関係や「存在忘却としての歴史」と技術との関係といった議論は、その後も『ゲシュレヒト』シリーズなどを通じて展開されていくことになるデリダのハイデガー解釈を理解するうえで重要な資料となるだろう。

その上で評者がとりわけ注目したいのは、彼らと比べてそれほど多くはないものの、とはいえ無視できない分量と重要性を持つカントに関する多くの言及である。この講義では一見すると副次的な主題であるように見えるものの、同時期にデリダは『判断力批判』を中心としたカント論を幾つか著している。『理論と実践』第 5 回講義においてデリダは「生産としての自然」と「技術」とのかかわりという観点からハイデガーの議論について論じている（cf. p. 75）が、その観点から見ればとりわけ美を自然による「生産」として理解するカントの『判断力批判』を論じた「エコノミメーシス」が同じ時期に書かれていることは興味深い。もうひとつのカント論『絵画における真理』に大きな影響を与えているハイデガーの『芸術作品の根源』及び『ニーチェ』も含めて、この時期のデリダのカント-ハイデガー解釈を包括的に理解する鍵となり得る議論として『理論と実践』を読むこともできるだろう。

また「20 世紀フランスにおける現象学とエピステモロジーの関係」という評者の個人的関心からすれば、とりわけ「生産」の概念を巡ってアルチュセールによる「認識論的切断」というモチーフに注意を払いつつも、それを超えた連続性をハイデガーのマルクス読解の可能性の中に見出そうとするデリダの身振りは注目に値する（cf. p. 74）。このデリダの態度はアルチュセールやデリダといった固有名を超えて、エピステモロジーと現象学というより広い視座からの検討を要求するものであるだろう。

いずれにせよ、この『理論と実践』講義が比較的研究の進んでいない 1970 年代のデリダ思想を明らかにする上で重要な手掛かりとなることは間違いないだろう。本稿の紹介が、読者がこの講義に取り組むためのひとつの手引きになれば幸いである 。

注

(1) 当初、この書評は仏語版を対象として執筆される予定であった。しかし英語版の編者であるジェフリー・ベニントンとペギー・カムフによれば、仏語訳には講義が行われた年度などの初歩的なミスや、デリダの表現の無言の修正など幾つかの問題点が存在している（cf. p. VII）。それを受けて英語版は（仏語版からの翻訳ではなく）直接カリフォルニア大学アーバイン校に保存された講義録の草稿から作成されている。本書評が英語版を参照するのはこうした事情による。

(2) その作業は（書評ではなく研究論文という仕方で）別稿にて行いたい。

(3) 「哲学者たちはただ世界をさまざまに解釈してきたにすぎない。肝腎なのは、世界を変革することである。」（『ドイツ・イデオロギー』p. 240）

(4) 「あらゆる社会生活は本質的に実践的である。理論を神秘主義へと誘い込むあらゆる神秘は、人間の実践およびこの実践の概念的把握において合理的に解き明かされる」（『ドイツ・イデオロギー』p. 239）。アルチュセールのエピグラフは二文目のみ。

(5) 第二回講義では『人倫の形而上学の基礎付け』「序論」、『純粋理性批判』「超越論的方法論」、そして『判断力批判』「序論」「序言」の三つが取り上げられる。ポンジュの「寓話」は前年の『生死』講義や続く『プシュケー』でも参照されているほか（未刊行の為内容は未確認できなかったが）前年にも「La Chose（Heidegger/Ponge）」と題された全三回の講義が行われている。

参照文献

マルクス、カール・エンゲルス、フリードリヒ 2002『ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳、小林 昌人補訳、岩波文庫。

ハイデガー、マルティン 2021『ハイデガー全集第 9 巻　道標』辻村 公一・ブフナー、ハルトムート訳、東京大学出版会。

デリダ、ジャック 2000『ポジシオン』高橋 允昭訳、青土社。